

長岡紫

天の懐

小さな私が否定された日には
自分に刺さったトゲを
空に預ける

一体 誰が「否」と言ったのか
空は決して尋ねない

如来のように私を抱き
無言で 無数の手を差し伸べて
微動だにせず そこに居る

次の日 天は徐ろおもむに
羽衣を纏い 地上に舞い降りて
くしゃくしゃになった私の心を
丁寧に畳んでくれた